

本学運動クラブ員のクラブ参加意識の調査

— 1年生の退部理由について —

Investigation into reasons to cease of participating in athletic clubs about freshmen in Kokushikan university

滝山 将剛・伊達 治一郎・朝倉 利夫

Yukitaka Takiyama, Jiichirn Date and Toshio Asakura

I はじめに

スポーツ活動の究極の目的は、試合の場で選手やチームがもつ潜在能力を十二分に発揮することであり、そのために果す指導者の役割はきわめて重要である。現実の指導者の主な役割は練習やトレーニングの指導であり、個人種目あるいは団体種目を問わずその効果を最大ならしめるために、それぞれの指導者は独自の方法を編みだすことに努力を傾注する。一方選手は指導者の指導を肯定的に受けとめることが大切な条件である。そのためには相互の信頼関係、すなわち基本的な人間関係が確立されていることがスポーツパフォーマンスにおいて重要である。ことに、大学スポーツにおいては人間形成という面から指導者と選手、そしてチーム内の人間的信頼関係がその効果を左右する最も重要な要因となる。これらの観点から、本学体育学部運動クラブの状況を把握することで、今後のより良い指導方法の確立のための資料を得ようとした。

II 調査方法及び対象

本研究の実施にあたっては、その目的と方法論上の問題点から、氏名、所属クラブについては無記入とし、対象は体育学部男女一年生 234名（男 218名、女16名）であった。実施日は昭和61年12月12日から15日であった。調査に使用した質問項

目の内容を表1に示した。この際、項目の選択数については複数項目を認めた。

III 結果と考察

質問項目の1にあたる「過去に退部をしたり、退部しようと考えたことがある」の結果は、「ある」と答えた者が103人（全体の44%）であり、「ない」と答えた者が131人（全体の56%）であった。この結果から何んらかのかたちでクラブを続けるかどうかに関して心の動揺を経験した者が44%もみられたことは今後の指導法やクラブ運営において工夫が必要であることを顕著に示唆している。そこで、これらの中から本調査の目的である「過去に退部したり、退部を考えたりした」と答えた者103人について以下の項目ごとに結果を示す（退部したり、退部を考えた理由により以下1-4の項目に総めた）。結果の分析に関しては、男女差は考慮しなかった。

1) クラブ指導体制による理由について、

この項目はア)～オ)の5項目からなっており全体(143)の調査結果を図1に示した。統計処理の結果、それぞれの項目に有意な差が認められた($\chi^2 = 28.6, df = 4, P < 0.001$)。この結果より、過去に退部をしたり、退部を考えた理由が㊦と㊧の項目に集中している。この二つの項目は類似しており、自分がクラブに対して持っている理想や高校時代に経験して来たことと喰い違ってい

表1 大学運動部（クラブ）に関する調査

国士舘大学体育学部格技研究室

この調査は、大学運動部における適切なコーチングに役立てようとして実施するものです。
以下の項目について経験を記入してください。

大学, 学部名	大学	学部
クラブ名		
部員数		
出身都道府県	出身高校	高校（公・私）
年齢	歳	男・女

- あなたは所属クラブを過去に退部しようと考えたり、退部したことがありますか。
ア) ある イ) ない
- 退部した経験や退部しようと考えたことのある方、また退部しようと考えたが退部を思い止まった方で、次の項目のなかに該当する理由があれば○印をつけて下さい。
A クラブ指導体制による理由
ア) 監督, コーチの指導方針と自分の理想が合わなかったから。
イ) クラブの組織に馴染めなかったから。
ウ) 具体的な指導（技術 etc.）が十分なされなかったから。
エ) 指導内容が理解できなかったから。
オ) その他
B 個人的な理由
ア) 人間的に監督, コーチ, 先輩が尊敬できなくなったから。
イ) 自分自身の時間が欲しくなったから。
ウ) 練習が辛くてついて行けなかったから。（自分の能力, 体力に限界を感じたから）
エ) 正選手になれなかったから。
オ) ケガの為クラブを続けられなくなったから。
カ) 家庭の事情でクラブが続けられなくなったから。
キ) 親しい友人がやめてしまったから。
ク) 他のクラブ活動がしたくなったから。
ケ) 学業に支障が生じるようになったから。
コ) その他
C クラブ内の理由
ア) 所属クラブの活動に魅力がなくなったから。
イ) クラブ内での人間関係（先輩, 同僚, 後輩その他複数）がまずくなったから。
ウ) 先輩・後輩という上下関係（挨拶等を強要されることなど）がいやになったから。
エ) その他
D その他に、クラブを退部した主な理由がありましたら詳しく記入してください。
E 退部を思いとどまった理由
ア) 監督, コーチに説得されたから。
イ) 先輩に説得されたから。
ウ) 友人に説得されたから。
エ) 母校（高校, 中学）の監督, 顧問に説得されたから。
オ) クラブの監督, コーチ以外の先生に説得されたから。
カ) 自分自身で考えて意志を変えたから。
キ) その他

記入年月日 昭和 年 月 日

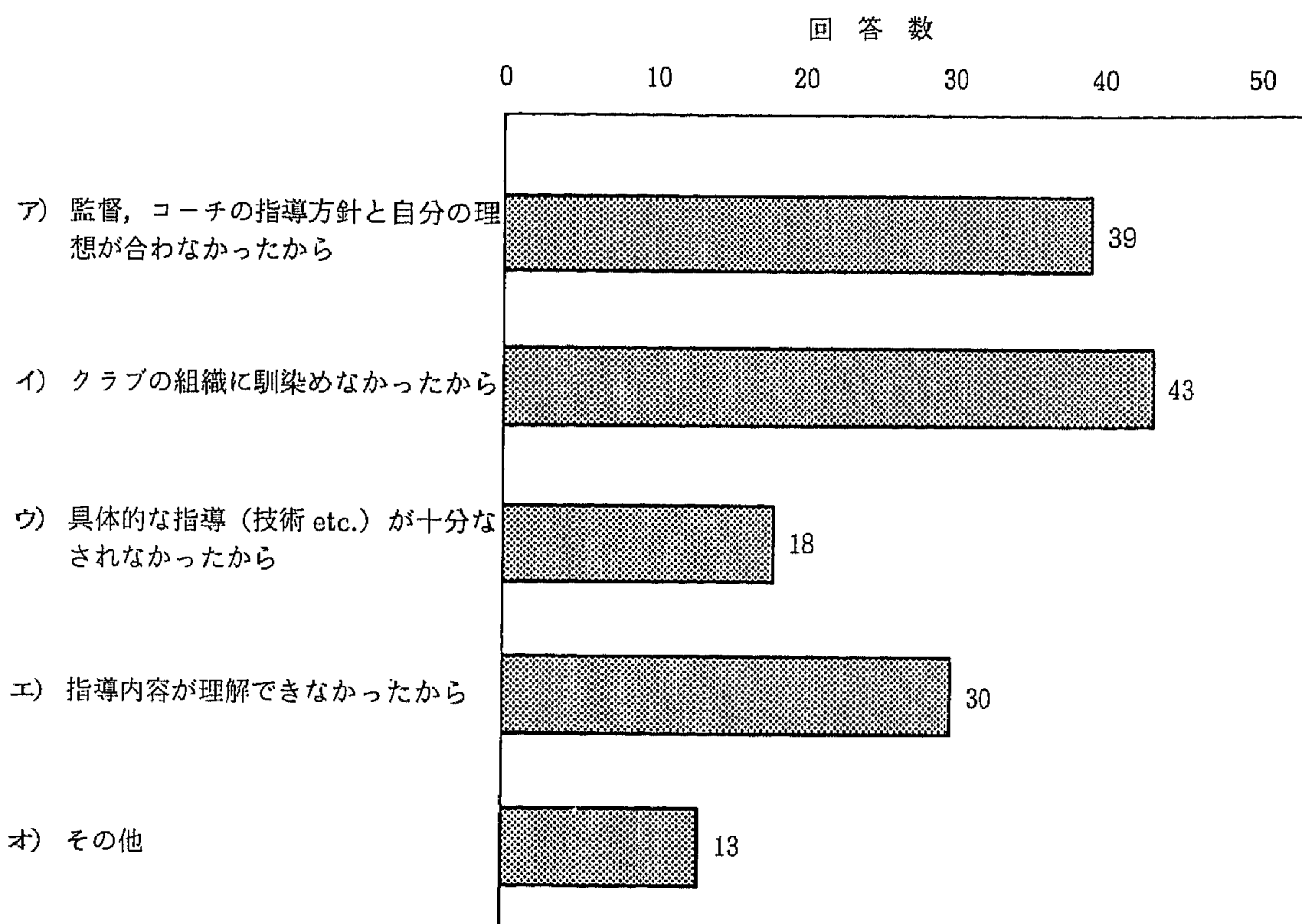


図1 クラブ指導体制による理由

ることが大きな原因であると考えられる。精神的にも肉体的にも過去の経験のある環境と現実のそれとの差, ならびにギャップを想像以上に大きく感じている結果であることを示唆している。注目されることは④の項目の「指導内容が理解できなかった」ことが退部の理由として想像以上に多かったことは、指導者が学生の技能レベルを理解することなく、一方的な指導がなされているものと推察され、指導者の資質が問われる点である。これは指導者の今後の大きな研究課題といえよう。

2) 個人的な理由について、

この項目はア)~コ)の10項目からなっており全体(142)の調査結果を図2に示した。統計処理の結果、これら間には有意な差が認められた、($\chi^2 = 149.4, df = 9, P < 0.001$)。この結果より、項目⑦は技術指導以前の問題であり、指導者側と指導される側との人間的信頼関係が疑われる項目である。学生が感性を有する人間である以上両者間に人間的な信頼関係がなければ学生がクラ

ブ活動に魅力を感じなくなるのは当然の結果と考えられる。指導者と学生との間に何らかの重要なすれ違いがあったことを示唆している。また、大学チームにおいては先輩、後輩という運動クラブ独得の人間関係も指導者との人間関係以上に大きな影響を及ぼすことがあることを指導者は知っておく必要がある。

項目④は、自分自身の生活とクラブ及び学業の両立が時間的に困難になったものと推察される。これは今回の調査の対象が一年生であったことから、クラブ内の雑務に追われることで自分の時間が無くなったものと推察される。クラブ内での上下関係のあり方、ひいては個人の人格尊重そしてプライバシーの問題とも関わり、今後のクラブ運営上の最も重要な問題点である。

3) クラブ内の理由について、

この項目はア)~エ)の4項目からなっており全体(96)の調査結果を図3に示した。統計処理の結果、これらにも有意な差が認められた ($\chi^2 =$

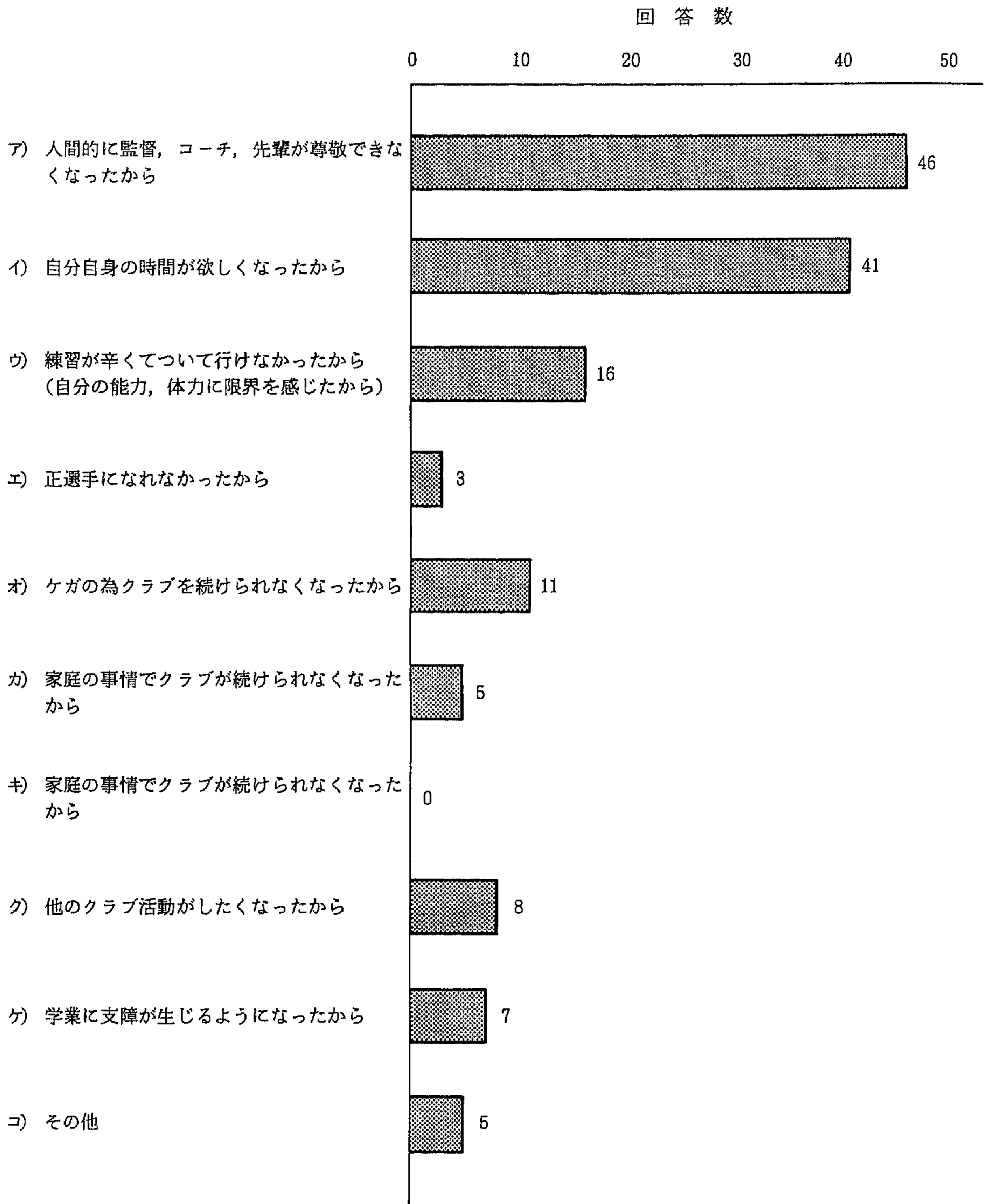


図2 個人的な理由

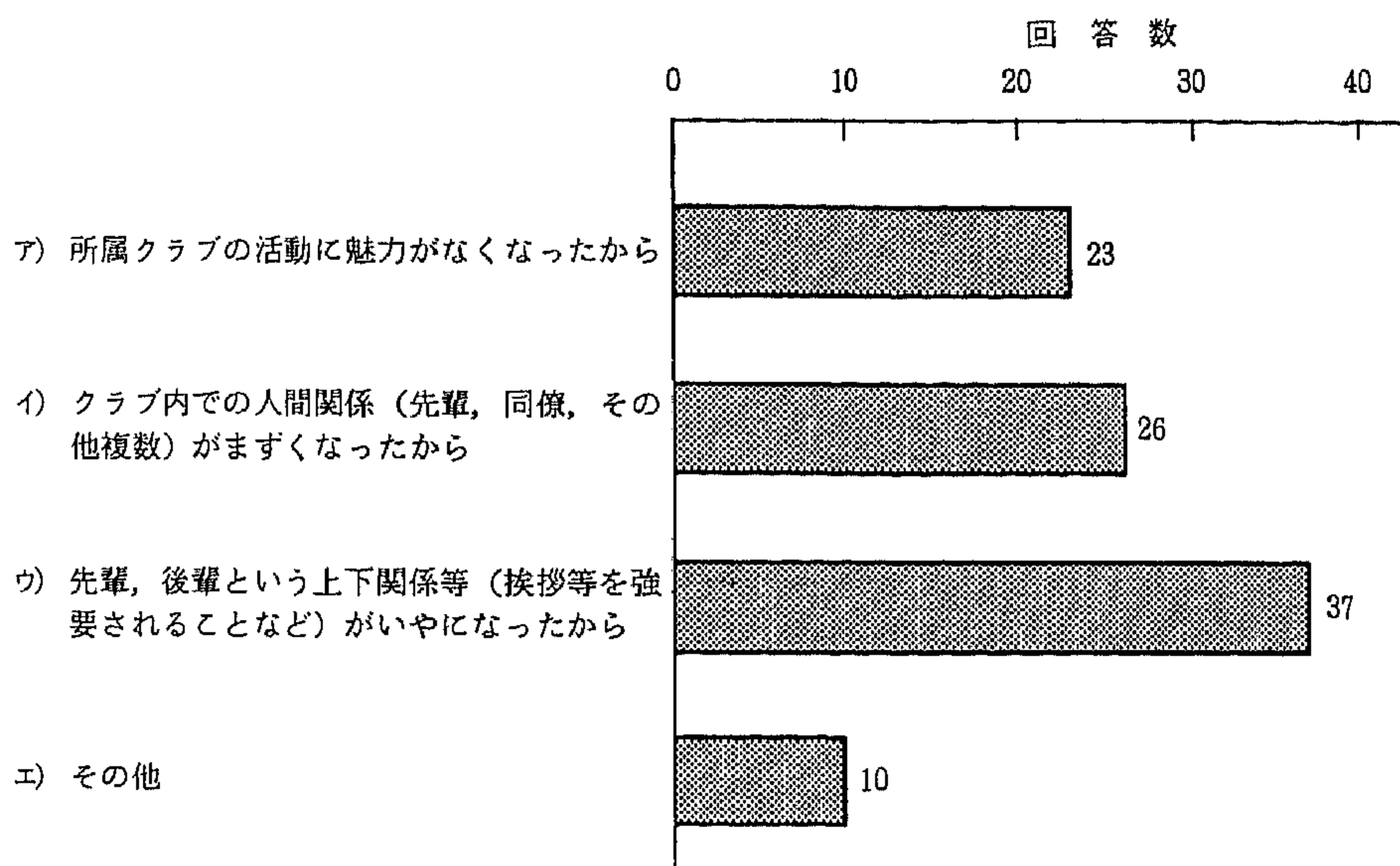


図3 クラブ内の理由

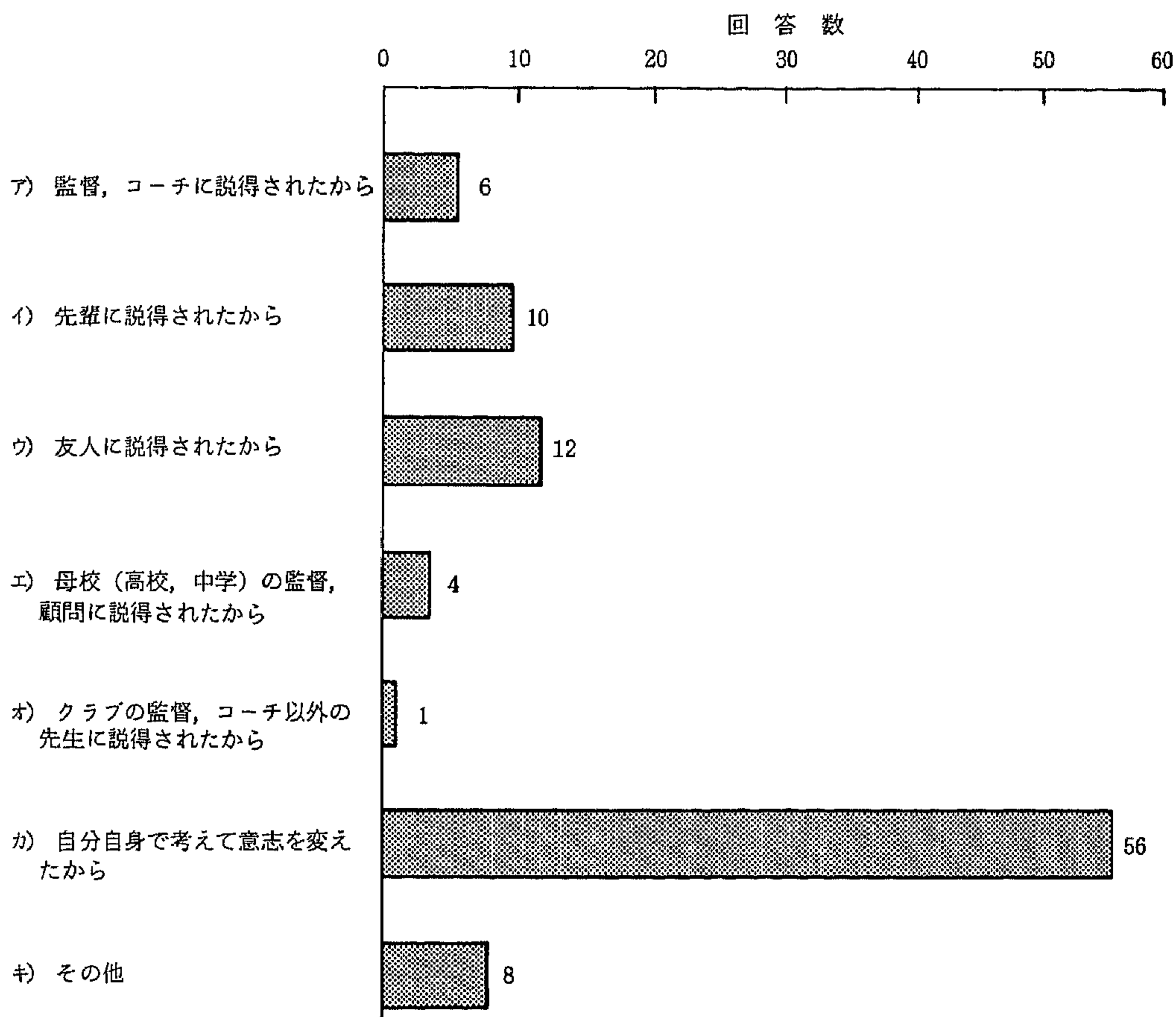


図4 退部を思いとどまった理由

15.42, $df = 3$, $P < 0.001$)。この結果より、項目①②は類似しており共にクラブ内での人間関係がまずくなったり、いやになったりしたことによるもので、解答Bの③の項目にも類似している。いずれも、クラブ内の人間関係の信頼度に問題があるものと推察される。スポーツ競技は人間を心身ともに極限状態におくことによって勝負(勝敗)を決するものである。その極限に挑戦する選手にとって心身にかなりの重圧がかかる。それによるストレスも想像以上に大きいことから、普段の生活も含めて合宿生活においては、人間関係を正常により良く保つことの困難さを示すものと考えられる。対象が一年であることから、年齢が若く環境の変化に対する対応の仕方にも問題があると思われるが、一般的な明るいイメージのスポーツマンとしての評価とは異っていることに問題があり、問題解決に困難がある。

4) 退部を思いとどまった理由について、

この項目はア)～キ)の7項目からなっており全体(97)の調査結果を図4に示した。統計処理の結果、これら間には有意な差が認められた($\chi^2 = 154.8$, $df = 6$, $P < 0.001$)。この結果より、項目④が最も多いことは、自分自身で十分考えた上での結果であり、一時的な感情の高ぶりから覚めて周囲を見渡すよゆうができてきたものと推察される。このことは、スポーツ選手であってもその活動を支えている源は“心(自分の意志)”であることを指導者は十分理解し、“考える”という習慣の指導も大切な指導の1つであることを示唆している。また次に注目されることは項目⑤⑥で友人、先輩から説得やアドバイスを受けたことで退部を止めているものもあり、ここにも良い人間関係の確立が大切であることを示唆していた。項目⑦が少なかったことは、指導者の立場にある監督・コーチへの相談が少なかったことであり、それは指導者と学生の信頼関係の程度からくるものと考えられる。指導者にとっては最も注目すべき結果であった。

IV まとめ

本学体育学部一年生234名を対象に、質問紙調査を実施し、運動クラブに関する指導上の問題点

の所在を検討した。その結果の概要を総括してみると次のようになる。

1. 対象者(男女)243名中、クラブを退部したり、退部しようと考えた者が103名(全体の44%)みられた。

2. 退部の動機は、クラブ内における人間関係の不和が最も多かった。この人間関係の不和も、監督・コーチに対するものと、先輩、後輩という上下関係に対するものが相半ばしていた。

3. 退部を思いとどまった理由では、自分自身の意志による判断が一番多かった。

これらの結果より、本学運動部の適切な運営とコーチング、そしてよりよい成果を期待するには、相当困難な問題が存在していることが示唆された。

本研究においては、昭和61年度体育研究所研究助成金(61-4)の交付を受けた。

また、質問紙作成については本学教養部坂井正郎教授の御助言をいただいた。調査にあたっては本学学生主事(大坪氏、伊藤氏、倉田氏)の協力を賜った。

参 考 文 献

- ① 藤善尚憲, 花田敬一, 河瀬雅史; スポーツマン的性格, 体育学研究, 10(1), 217-219. 1965.
- ② 平原豊弘, スポーツ・カウンセリングの実際—スポーツ・カウンセリングにおける選手へのアプローチについて—(1), 体育の科学, Vol; 31, 205-212, 1981.
- ③ 平原豊弘, スポーツ・カウンセリングの実際—スポーツ・カウンセリングにおける選手へのアプローチについて—(2), 体育の科学, Vol; 31, 289-294. 1981.